

徳島大学総合科学部 自然科学研究
第22巻(2008) 127-140

四国霊場と自然 - 神木、自然景観、寺紋について -

江戸 梢、藤原 久美子、横田 由紀、小野田 協子、葭森 健介、
平井 松午、佐藤 征弥*

徳島大学総合科学部、〒770-8502 徳島市南常三島町 1-1

*satoh@ias.tokushima-u.ac.jp

The 88-temple pilgrimage in Shikoku Island and the nature around the
pilgrimage route: histories of sacred trees, landscape and crests.

Kozue Edo, Kumiko Fujiwara, Yuki Yokota, Kyoko Onoda,
Kensuke Yoshimori, Shogo Hirai, Masaya Satoh

Faculty of Integrated Arts and Sciences, The University of Tokushima 770-8502, Japan

**Correspondence: satoh@ias.tokushima-u.ac.jp*

Abstract

In order to understand relations between the 88-temple pilgrimage in Shikoku Island and the nature around the pilgrimage route, we made comprehensive research on the temples from the 1st to 5th of the 88 temples and the Ooasahiko Shrine (the most respected shrine and is neighboring to the Ryozenji Temple).

In this report, we describe about following three points; 1) history of sacred trees, 2) history of landscape and 3) crests of the temples. As for the first point, there are big sacred trees in the shrine and the two temples, a camphor tree in the Ooasahiko Shrine, a cedar tree in the Gokurakuji Temple, that is called “long-life cedar”, and a ginkgo tree in the Jizoji Temple that is called “mother’s breast ginkgo”. However, we could find a few records on them written in old literatures. A distinct tree in the picture written in Edo era may be identical to the ginkgo tree of the Jizoji Temple. As for the second point, pine forests were dominant in the mountains around the shrine and the temples in Edo era, however, they have almost completely disappeared due to pine wilt disease. Moreover, fields of indigo and sugar cane along with the route of the pilgrimage in Edo era have also disappeared, and now orchards are conspicuous in this area. As for the last point, all five temples use plants as their crest, the flower of paulownia tree in the Ryozenji Temple and the Gokurakuji Temple, the flower of chrysanthemum in the Konsenji Temple, the flower of Tachibana in the Dainichiji Temple and the pine tree in the Jizoji Temple. Since there is no detailed research on the crests of the 88 temples further investigation is expected.

Keywords: crest, history, landscape, sacred tree, the 88-temple pilgrimage in Shikoku Island



図1 調査を行った場所

現地を調査を行った大麻比古神社、一番札所靈山寺、二番札所極楽寺、三番札所金泉寺、四番札所大日寺、五番札所地蔵寺の位置を地図 (a) 及び航空写真 (b) にプロットした。(b) は写真画像として Raster 100000 を使用し、ArcGIS により平井が作成した。旧来の遍路道である撫養街道およびそこから別れる遍路道についても示した。

今回の調査では、上記の神社や霊場の他、靈山寺および極楽寺門前の遍路道、そして大日寺から地蔵寺に至る遍路道を実際に歩いて調査した。



1. はじめに

本調査は、平成19年度に徳島大学大学院人間・自然環境専攻の学生を対象とした「地域文化環境論」の授業において、四国霊場や遍路道の歴史と自然について行った実地調査とそれに基づく議論の内容をまとめたものである。遍路の歴史や現代の遍路道の様相に関しては、多くの出版物が出されており、また詳細な学術調査も行われているため(『遍路道 - 徳島県歴史の道調査報告書第五集』¹⁾)、今回の調査では自然との関係について新しい視点で四国霊場や遍路道に対してアプローチすることを試みることにした。そして、大麻比古神社および一番から五番までの霊場を訪ねたり遍路道を歩く体験授業の中から、自然との繋がりを探し、(1)境内に祀られている神木の歴史、(2)境内地や遍路道の自然景観、(3)寺紋の3点について特に注目してまとめたので、以下のように報告する。

調査は、2007年11月23日に実施し、大麻比

古神社をスタートして二番札所極楽寺、一番札所靈山寺まで徒歩移動、その後自動車移動して、五番札所地蔵寺から四番札所大日寺まで徒歩移動した(図1)。また、後日佐藤が一番札所靈山寺、三番札所金泉寺、五番札所地蔵寺について追加調査を行った。

以下に各テーマについて述べていく。

2. 神木について

調査対象としたのは大麻比古神社の大クス、二番札所極楽寺の長命杉、五番札所のたらちね銀杏の3本の巨樹である(図2)。これらの巨樹は、神木として尊崇され、訪れる人々の目を楽しませ、これらの社寺のシンボルとして宣伝にも貢献している。

大麻比古神社は徳島県で最も由緒の高い神社であり、初詣には県下で最も多くの参拝客を集め

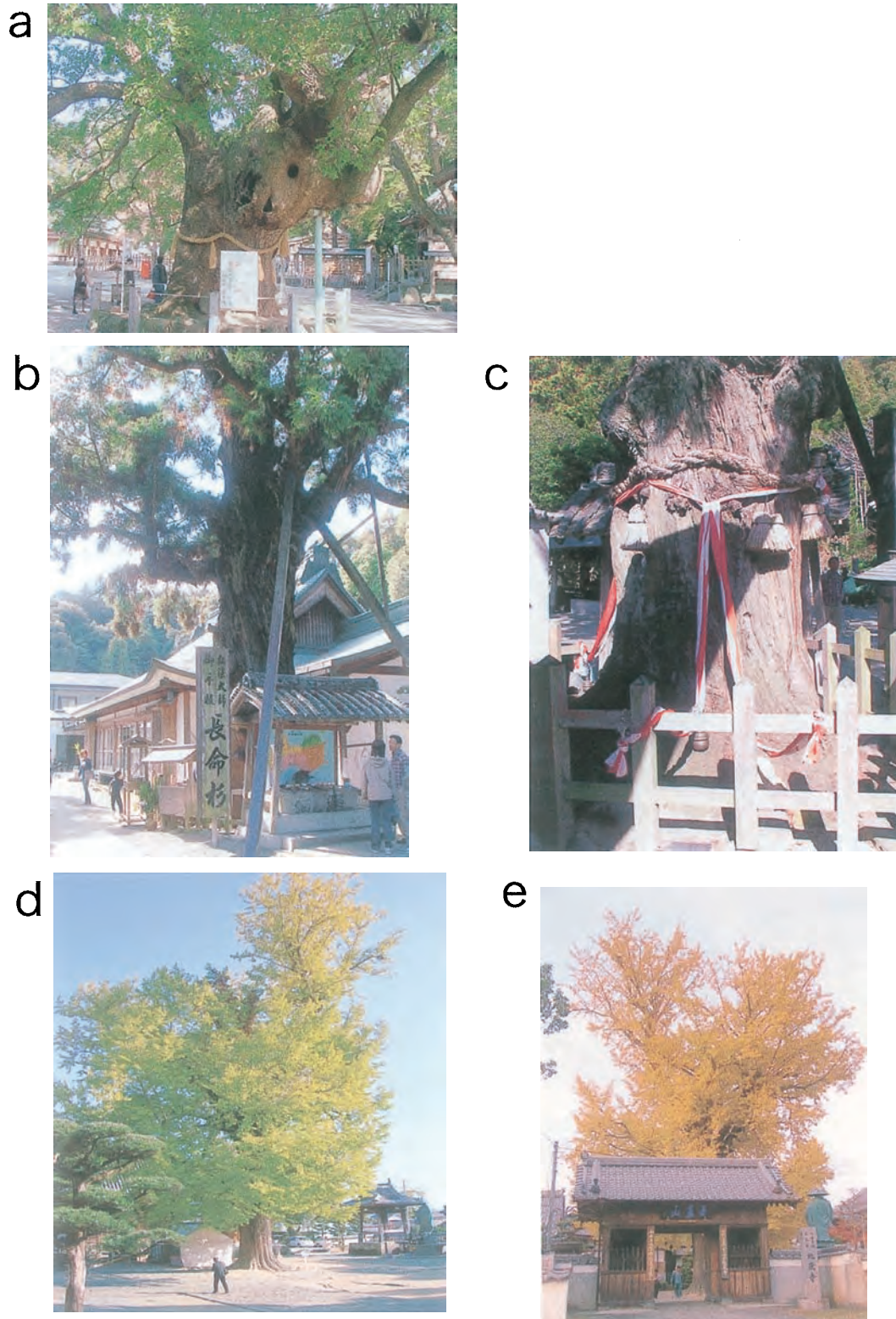


図2 今回調査した巨樹の写真

(a) 大麻比古神社の大クス。(b) (c) 二番札所極楽寺の長命杉。(d) (e) 五番札所地藏寺のたらちね銀杏。(a)～(d) は2007年11月23日撮影、(e) は12月9日撮影。

ることで知られる。一番札所霊山寺に隣接し、明治になるまで別当として霊山寺を管轄していた。そして、この神社には立派な御神木のクスノキ(図2a)がある。目通りの幹周囲8.3m、高さ22mで、樹齢1000年余と伝えられ、平成7年(1995)に鳴門市指定天然記念物に指定されている。鳥居と本殿の間に、堂々と立っている。かなりの存在感である。

二番札所極楽寺極楽寺には長命杉という弘法大師が植えたといういわれを持つスギの巨樹がある(図2b、c)。目通り周囲は485cm、高さは20mであり、昭和42年(1967)に鳴門市指定天然記念物に指定されている。写真cのように幹には注連縄の他に紅白の紐が巻かれ、紐のその先には大きな鈴がつけられていて手前の柵にかけられている。参拝者は紐を振って鈴を鳴らし、長命を祈るのである。

五番札所地藏寺のイチョウは、別名たらちね銀杏と呼ばれる目通り幹周囲540cm、樹高は30mの雌のイチョウがある(図2d、e)。このあたりの地域は日本でも他に類をみない巨樹イチョウが密集した地域であり、地藏寺のイチョウはその中では決して大きくはないが、境内の中央にそびえる姿は参拝者の目を引きつけてやまない。イチョウの幹に一円玉を貼付けて願掛けをするという習慣もみられる。

では、これらの樹がいつの頃から尊崇されるようになったのか、歴史資料から検証してみよう。以下に参照した文献を挙げる。

遍路が確立した江戸時代の史料については、江戸時代の遍路記録が6編収められている伊予史談会編集の『四国遍路記集』(1981)²⁾を参照した。6編のうち以下の4編は各霊場や道中についてよく描写されている。

・『四国辺路日記』承応2年(1653)³⁾

本書は高野山の僧澄禅による承応2年(1653)の遍路紀行文である。

・『四国遍路道指南』貞享4年(1687)⁴⁾

著者の真念は、大阪の高野聖系の修行者であったと考えられている。四国遍路のガイドブックとして書かれ、その後の巡礼者に大きな影響を与えた。霊場を88ヶ所とし、霊山寺を一番とする参詣順序を決定づけたのも本書である。

・『四国遍路霊場記』元禄2年(1689)⁵⁾

著者は高野山宝光院の雲石堂寂本であり、本人は四国遍路に出たことはないが、上記『四国遍路道指南』⁴⁾の著者である真念と懇意であり、彼の資料や彼と一緒に遍路を行った洪卓の描いた絵を提供されて編修したのが本書である。

・『四国遍礼名所図会』寛政12年(1800)写⁶⁾

原本がいつ誰が書いたものか不明であるが、1972年の久保武雄氏の復刻本によると河内屋武兵衛という人物の蔵書の中にこの本が存在し、調

査の結果、著者は寛政12年(1800)3月20日に出発し、同年5月3日帰宅したとされる。

また、上記の『四国遍路記集』²⁾にまとめられているものとは別に、江戸時代の史料として、および文化8年(1811)、文化11年(1814)、弘仁3年(1846)に3回出版された阿波の名所を紹介した旅行ガイドブック『阿波名所図会』⁷⁾と、江戸末期から明治期に活躍した大旅行家松浦武四郎が天保7年(1836)に記した『四国遍路道中雑誌』⁸⁾を取り上げた。

他に参照した史料として、大正3年(1914)に徳島県山林会が発行した徳島県の巨樹に関するデータを冊子にまとめた『徳島県老樹名木誌』⁹⁾、同じ調査データを基に巨樹を相撲番付風に並べた「徳島県老樹名木番附」¹⁰⁾、徳島新聞の記者であった横山春陽が巨樹の伝説を収集して昭和35年(1960)に著した『阿波名木物語』¹¹⁾を用いた。

以下、それぞれの巨樹がこれらの史料の中どのように紹介されているかみてみよう。

<大麻比古神社の大クス>

大麻比古神社の大クスは、江戸時代の絵図や文章には見られず、史料に登場するのは大正に入ってからである。大麻比古神社宮司の金倉氏に話をうかがったところ、現在のクスノキは本殿の前にあるが、明治13三年(1880)までは本殿は今の社務所の位置にあり、クスノキは本殿の右後ろ、崖の斜面に生えていたという。人々の目にとまるようになったのは、この移築の後のことであろう。

大正3年(1914)に徳島県山林会が発行した『徳島県老樹名木誌』⁹⁾と「徳島県老樹名木番附」¹⁰⁾はそれぞれ徳島県の巨樹に関するデータを冊子および相撲番付風に並べたものである。この2つの資料にはともに大麻比古神社の大クスが掲載されている。『徳島県老樹名木誌』⁹⁾にはクスノキの17番目に「板東の樟」として載っており、地上五尺の周囲が二十四尺、樹高が十間、樹齢が六百年となっている。「徳島県老樹名木番附」¹⁰⁾にも「板東の樟」として登場しており、幹周囲が二丈四尺、樹高が十間と同じであるが、樹齢は六百八十年となっていて『徳島県老樹名木誌』⁹⁾より80年加算されている。

また、昭和三年に四国山林会が発行した『四国老樹名木誌』¹²⁾にも「板東のクス」として掲載されていて、地上1.3mの幹周囲が7.3m、樹高13m、推定樹齢500年と紹介されている。先の2つの資料より樹高は5mほど低くなっており、幹の折損があったのかもしれない。樹齢もかなり短くなっているが、理由は不明である。

<極楽寺の長命杉>

江戸時代や大正時代の史料にはこの木に関するものはなかった。スギの巨樹の場合、幹周囲がもっと大きいものが多数あり、サイズのには見劣りするかもしれないが、樹肌には迫力があり、霊場の境内に生えていることから、古くから有名であっておかしくなく、意外である。昭和35年

(1960)の『阿波名木物語』¹¹⁾には「極楽寺の大師手植のスギ」と紹介されており、昭和32年に寺を訪れた時にこの木をみたことが記されている。該当の部分は以下の通りである。

「境内の平地に、唯一本空に向ってそびえる大樹が、寺の見えるあたりから目についた。青味の勝った山の緑にくらべて、これは黄色がかった緑であるのと、山の緑を離れてくっきりと浮出している目で目立っていた。

近よってみると、それはスギの古木で、根元には“大師手植杉”の標示が立っていた。目通り回り約五メートル、西側にはすでに空洞ができる前の朽ちた部分が露出している。高さはおよそ二〇メートルもあろうか、樹勢はおとろえているようだ。」

＜地蔵寺のイチョウ＞

寛政12年(1800)写の『四国遍礼名所図会』⁶⁾の地蔵寺の項には、文章ではイチョウは登場しないが、絵には目立つ樹が1本描かれている(図6b, c)。樹を見る限りではイチョウとは断定できないし、建物の配置も現在とは異なっているのだが、参道との位置関係からすると現在のイチョウと一致する。これが、イチョウであるとすれば、地蔵寺のイチョウに関する史料の中で、最も古いものとなる。

しかし江戸末期の『四国遍路道中雑誌』⁸⁾(図6d)や『阿波名所図会』⁷⁾ではこの木に該当する記載は見当たらない。『阿波名所図会』⁷⁾は、阿波の名所を紹介した旅行ガイドブックであり、この時代に諸国で同様のものが多く作成されている。本書には、地蔵寺の奥の院である五百羅漢の様子を描かれていて、絵の右下には地蔵寺の一部が描かれているが、イチョウが位置すると思われる場所は絵の構図に入っていないので、イチョウが存在したかどうかは不明である。しかし、もしイチョウが存在したとしても、この絵の構図から外されているということは、描く必要を感じなかったわけであり、当時は寺を象徴するほどの樹ではなかったと推測される。

大正期の『徳島県老樹名木誌』⁹⁾「徳島県老樹名木番附」¹⁰⁾や昭和の『阿波名木物語』¹¹⁾にはこの木は登場しない。

なお、住職にお話を伺ったところ、このイチョウの別名「たらちね銀杏」と名付けたのは現住職のご母堂であるとのことである。

以上のように、これら3本の巨樹は意外にも江戸時代に記録に登場していない(可能性があるのは五番札所地蔵寺のイチョウのみである)。もちろん記載がないからといって樹が存在していなかった、あるいは存在していても神木ではなかったと断定することはできない。しかし、『四国遍礼名所図会』⁶⁾における他の霊場をみると、神木はそれと分かるように描かれており、また樹種についてもある程度判別できるようにきちんと描き分けられている(図7)。例えば鶴林寺には神

木の菩提樹が描かれ、その上に「菩提樹」と示されているし(図7c)、藤井寺の有名なフジがそれと分かるように描かれている(図7d)。また後に併合されて安楽寺となった瑞運寺にはシュロやカエデと思われる木が描かれている。従って、もし大麻比古神社、極楽寺、地蔵寺の巨樹が当時から神木として尊崇されていれば、これらの史料に描かれていた可能性は高いのである。

3. 四国霊場および遍路道の景観について

＜遍路道を守るためには＞

道路や交通機関の進歩により、遍路のあり方は大きく様変わりし、乗用車やバスで乗り付ける人々が増加している。しかし、その一方で歩き遍路にも根強い人気があり、最近では昔ながらの遍路道も残すべきではという意見も出てきており、その保護の方法も検討されている。熊野古道の世界遺産登録によりその流れも加速している。そこで、霊場周辺や遍路道に昔ながらの景観が残っているか、残っているとしたらどのように保存したらよいかを今回歩いた遍路道について考えることにした。

今現在多くの人々が考える手法は文化的景観への登録によって遍路道とその寺を保存することである。文化的景観とは、「地域における人々の生活または生業および当該地域の風土により形成された景観地でわが国民の生活または生業の理解のために欠くことのできないもの」と定義されている。その中でも特に重要なものを重要文化的景観といい、これに選定されることにより、地域の条例にのっとった保護を恒久的に行うことができようになる。しかし、ここで一つ大きな問題がある。それは「道」が備えるべき機能性と、変化を拒否する保護の精神とが対立するということである。もともと、道とは地域住民の生活に根ざしたものであり、利用されなければ廃れていく。道や建物そして景観を保存することは、住民の利便性の追求を放棄することにつながる。さらに、遍路にある寺の多くは平地に存在する。高知や徳島に存在する一部の遍路寺は山の頂付近に存在するが、多くは四国四県の平野部に存在するため、多くの国道が遍路道を通り、便利になっていく一方でその使用頻度が高まるがゆえに、旧来の遍路道においては道としての存在意義が薄れてきている。

このような問題点がある中で、遍路道を保護するためにはどのような方法があるだろうか？その方法を考えるために、他の地域の「道」の保存への取り組みとして「紀伊山地の霊場と参詣道」と「中山道」の2つをみてみよう。

＜紀伊山地の霊場と参詣道の保存＞

「紀伊山地の霊場と参詣道」は、「熊野三山」、「吉野・大峯」、「高野山」の3つの霊場と、これらを結ぶ「熊野参詣道(熊野古道)」、「大峯奥駈道」、「高野山町石道」からなり、三重県・奈良県・

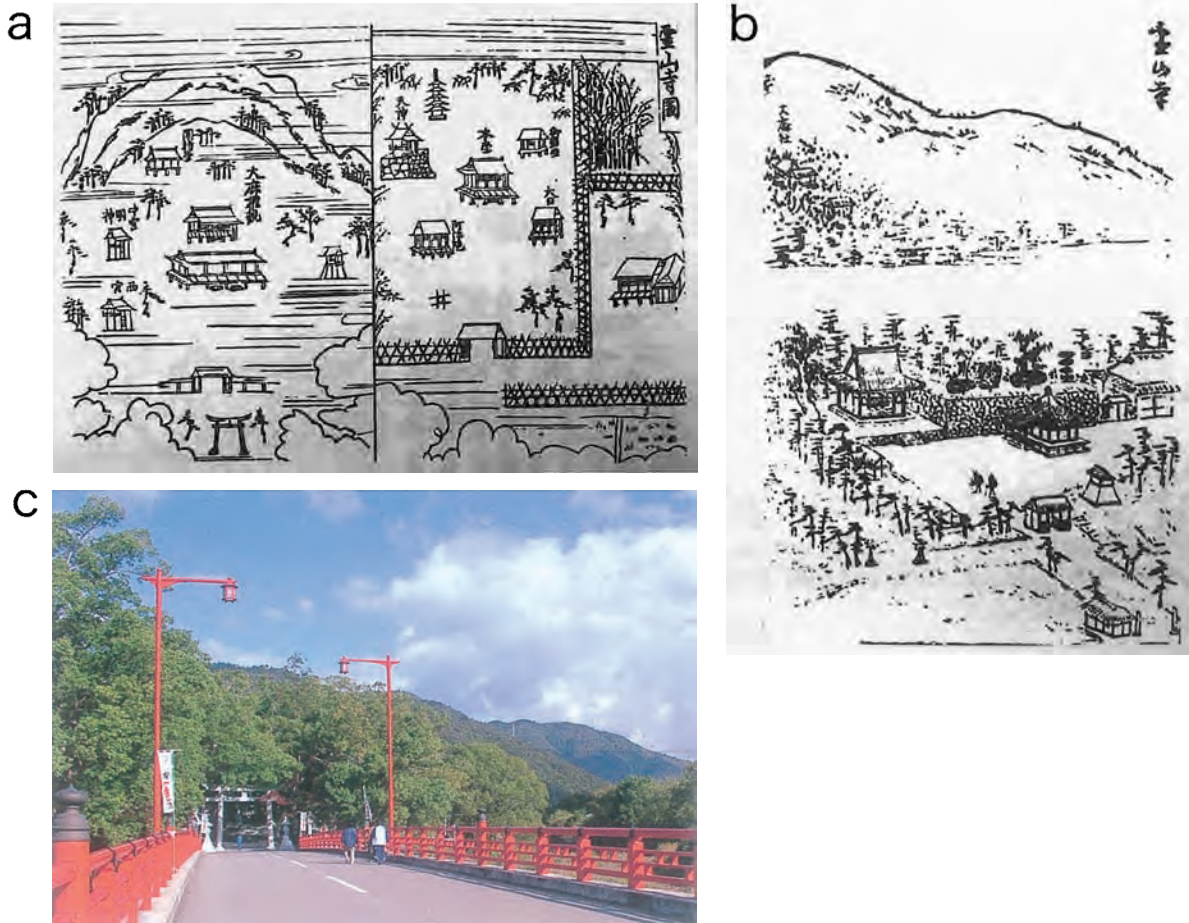


図3 大麻比古神社及び一番札所靈山寺周辺の景観

(a)『四国遍路道指南』⁴⁾における大麻比古神社(左)及び靈山寺(右)の様子。(b)『四国遍路名所図会』⁶⁾における靈山寺の様子。奥の山麓にある「大麻社」が大麻比古神社。(c)現在の大麻比古神社の鳥居前の様子。

和歌山県の合計 23 市町村にわたって広がっている。平成 16 年(2004)にユネスコの世界遺産に登録された。
この参詣の道は、古代から日本の宗教・文化の発展と交流に大きな役割を果たしてきた。自然崇拜に根ざした神道と中国から伝来した仏教の両方の一大中心地として、神仏習合という日本固有の宗教観の形成に大きな影響を与えた土地でもある。これらの霊場に至る参詣道も信仰の拡大とともに整備され、周辺の文化的景観とともに当時の状態が維持されている。とはいっても、昔の趣を残すものもあればそうでないものもあるため、以下に示すように分類したうえで、保存する対象として適さないものは除外するという方法をとっている。

道の分類

- ・ 往時の古道の幅員や石畳などの設備および周辺環境が残り、今も道として機能しているもの。
- ・ 道路機能は既に失われているが、往時の古道の様相が伝わる道。
- ・ 農村・田園または森林景観とマッチし、幅員など、比較的往時の形状を伝える未舗装の道。
- ・ 舗装された道だが、旧街道を彷彿とさせる家並みが残る道。
- ・ 農・林道や生活道路等として拡幅あるいは舗装され、旧状の失われた道。
- ・ 現在国道等、車道として景観が変わり、旧状を図り知ることができない道。

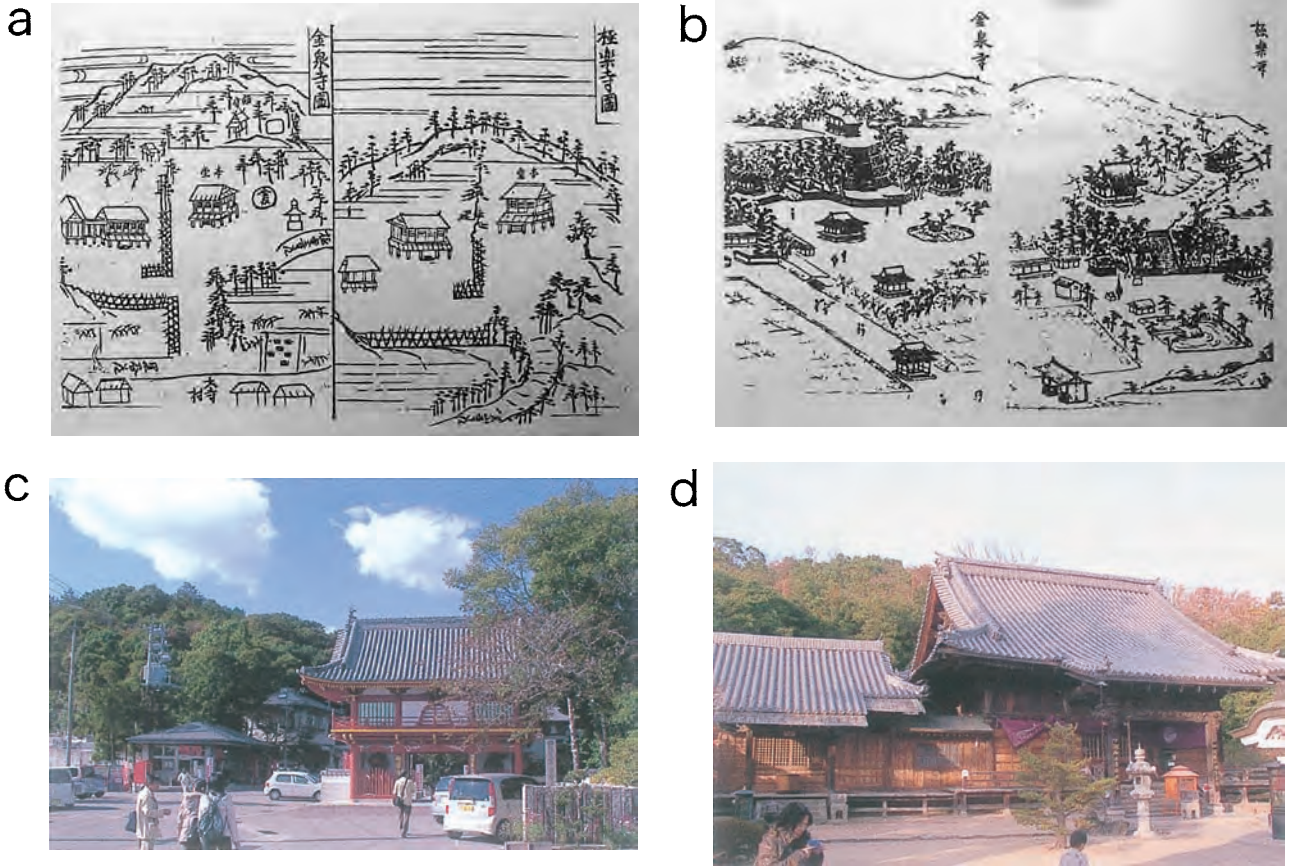


図4 二番札所極楽寺及び三番札所金泉寺周辺の景観

(a)『四国遍路道指南』⁴⁾における極楽寺(右)及び金泉寺(左)の様子。(b)『四国遍路名所図会』⁶⁾における極楽寺(右)及び金泉寺(左)の様子。(c)現在の極楽寺の山門と背後の山の様子。(d)現在の金泉寺の本堂と背後の山の様子。

- ・本来古道があったと推定されるが、区画整理等でまったく痕跡が残っていないもの。

これらの分類のうち、下の2つの項目については保護する対象として適切でない道として除外されている。

<中山道での取り組み>

重要文化的景観への選定を目指している場所に中山道がある。中山道は江戸を起点とする五街道の一つで、東海道とともに江戸から京都を結ぶ重要な街道であった。今も宿場町としての景観が残る妻籠宿および馬籠宿とセットで中山道の延長約20kmを世界遺産への登録を目指して提案書を文化庁に提案している(2007年1月23日提案、12月27日に再提案)。(提案理由を下に示してある)。

提案理由

- (1)近世交通システムの具現化した資産(中山道=別名・木曾街道)が存在する。
- (2)歴史小説「夜明け前」の舞台となった。
- (3)保存活動が評価されている。
- (4)他の類似遺産と比べ、政治、経済、文化に貢献している。

<四国霊場の現代の景観>

では、四国霊場では昔ながらの景観がどれ位残っているだろうか。まず、今回の調査で撮影した大麻比古神社と一番札所から五番札所までの霊場の周辺の自然環境を、先に挙げた江戸時代の絵図と比較してみよう。

図3~6のa、bはそれぞれ『四国遍路指南』⁴⁾

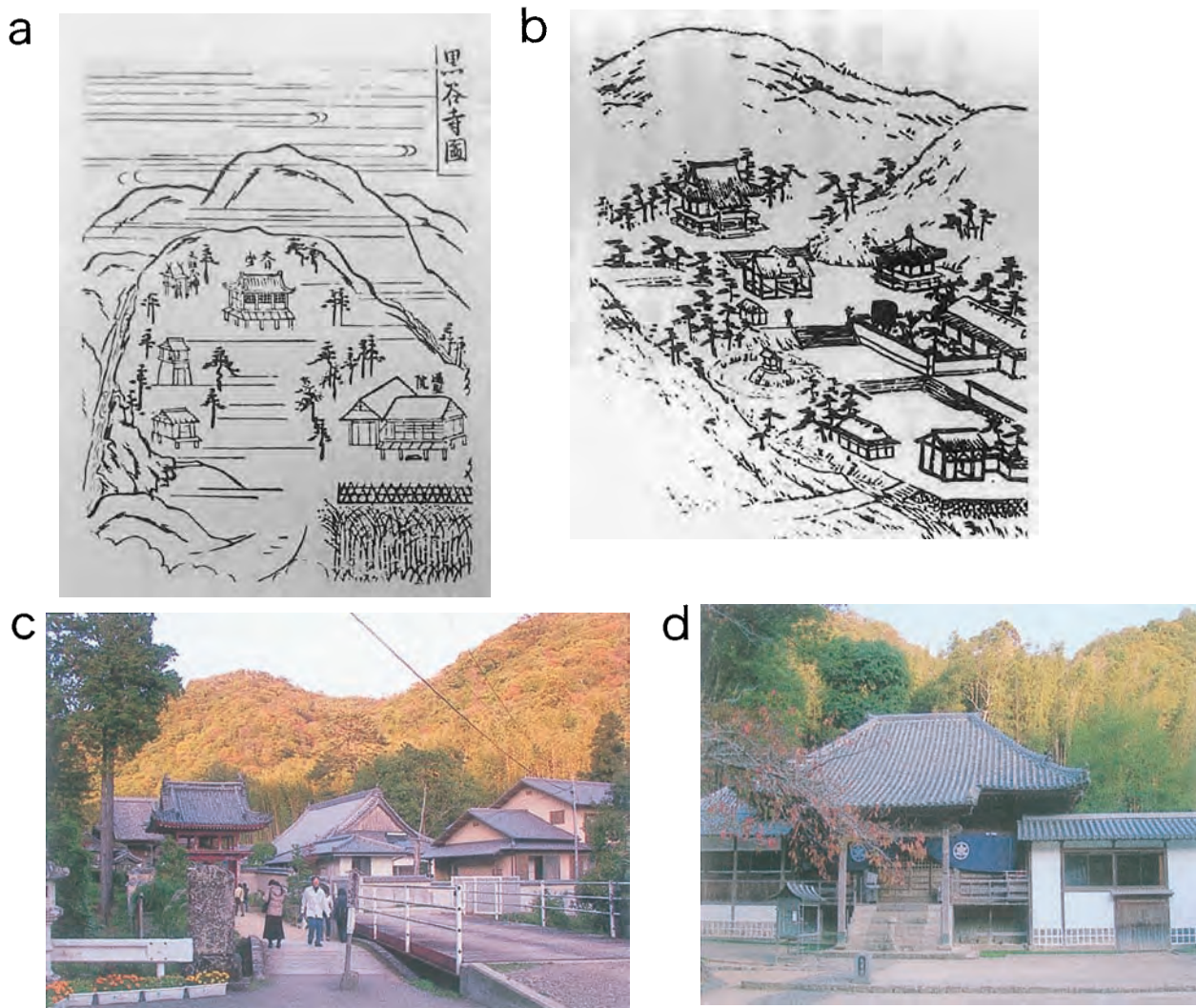


図5 四番札所大日寺周辺の景観

(a)『四国遍路道指南』⁴⁾における大日寺の様子。(b)『四国遍札名所図会』⁶⁾における大日寺の様子。(c) 現在の大日寺の門前からの様子。(d) 大日寺の大師堂及び背後の竹林。

および『四国遍札名所図会』⁶⁾の境内図である。両者が描かれた時代には100年以上の隔りがあり、建物の配置は異なっているし、五番札所地藏寺については川との位置関係から考えて寺の場所自体が移動しているようである。もちろん現在の境内の様子とも大きく異なっているが、建造物の変遷についてはここでは扱わず、周囲の自然について注目してみることにする。

全体を通して言えるのはマツが多く描かれていることである。大麻比古神社についてみると『四国遍路指南』⁴⁾では境内の中および背後の大麻山にたくさんのマツが描かれている。『四国遍札名所図会』⁶⁾では大麻山にマツは描かれていないが、霊山寺の門前およびそこから大麻比古神社

に続くと思われる道の両脇に松並木が描かれている。大麻比古神社の門前は、現在は松並木ではなくクスノキの並木になっているが、大麻比古神社の宮司のお話によると、門前の松並木は名物として親しまれていたが、松枯れによる大被害を受けてなくなってしまったそうである。

なお、これらがマツを描いており、他の木を描いていないのではないことは、例えば六十番札所横峰寺にはスギまたはヒノキの林が描かれていて、マツとはっきり区別して描かれていることは明らかである(図7a, b)。

『四国遍路指南』⁴⁾では二番札所極楽寺、三番札所金泉寺、四番札所大日寺、五番札所地藏寺においても周囲の山が松林であることが分かる。

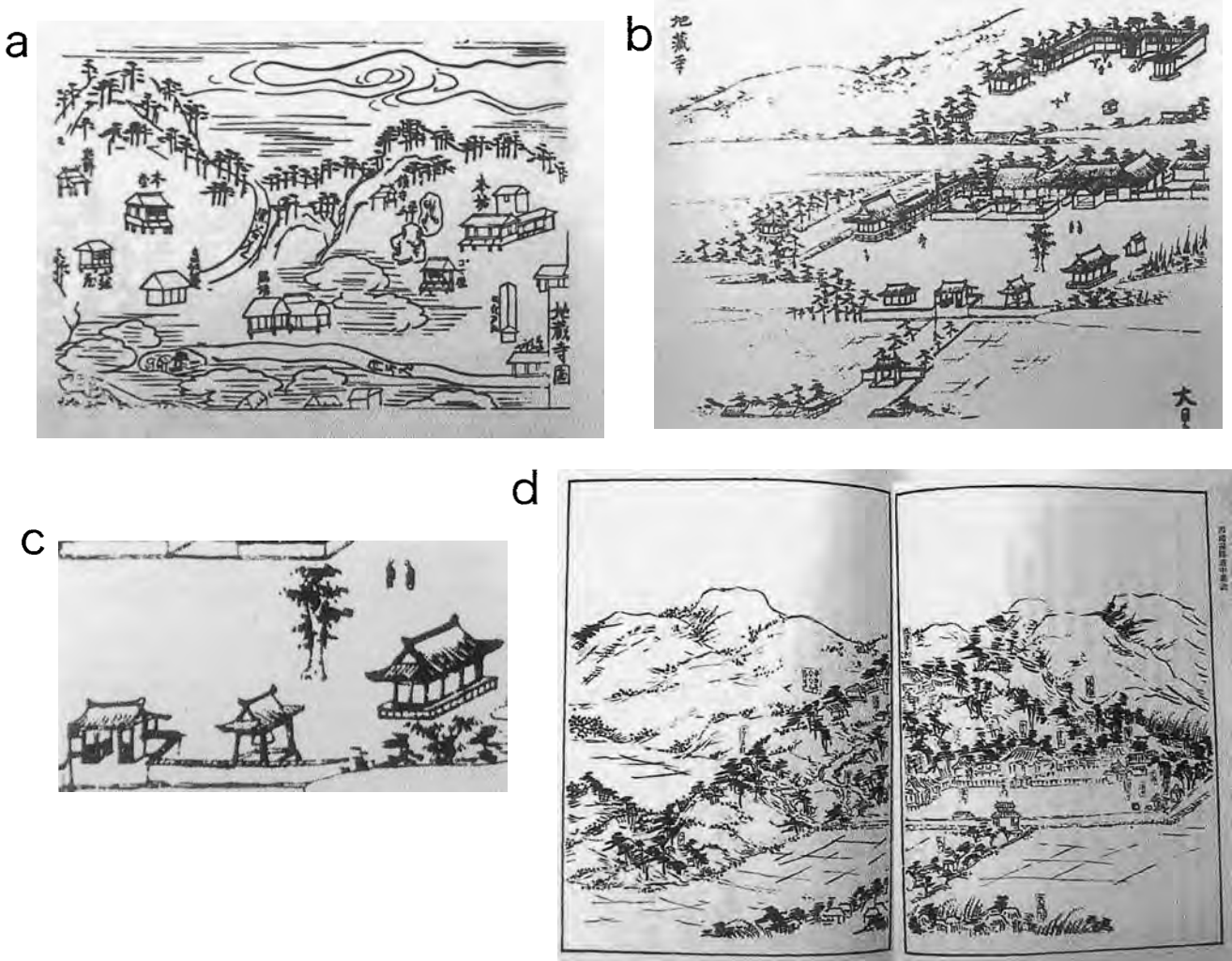


図6 五番札所地藏寺周辺の景観

(a)『四国遍路道指南』⁴⁾における地藏寺の様子。(b)『四国遍札名所図会』⁶⁾における地藏寺の様子。(c)は(b)の一部を拡大したもの。イチョウと思われる樹が描かれている。(d)『四国遍路道中雑誌』⁸⁾における地藏寺の様子。

『四国遍札名所図会』⁶⁾では山の木は省略されているが、二番札所極楽寺、四番札所大日寺、五番札所地藏寺では山麓に松林が描かれており山全体に広がっていることが推察される。五番札所地藏寺については、江戸末期から明治期に活躍した大旅行家松浦武四郎が天保7年(1836)に記した『四国遍路道中雑誌』⁸⁾に風景画(真景図)が残されており、この絵からも寺周辺の山は松林であることが分かる(図6c)。また、山以外では二番札所極楽寺や五番札所地藏寺も門前に松並木があったことが分かる。

では、現在の景観はどうであろうか。写真を見て分かるようにマツは激減している(図3~6)。では、いつマツは姿を消したのだろうか。昭和

53年(1978)発行の『徳島の自然 - 植物』¹³⁾によれば阿讃山脈全体を通じて自然林はほとんど見られず、二次林の疎林がその主体をなしており、山麓から中腹にかけては、木本ではアカマツ、コナラが主体であるとしている。また、阿部による昭和19年から昭和53年にかけての調査によれば、大麻山にみられる植物は「アカマツ林、アカガシ、アセビ林、カゴノキ、ヤマモモ、(以下略)」となっている¹⁴⁾。両者とも真っ先にアカマツ林を挙げており、この時期までアカマツが優先していたと言えることから、アカマツが少なくなったのは、徳島を含め全国的に流行した松枯れによるものであろう。平成16年の『徳島県環境基本計画(資料編)』¹⁵⁾では、かつて県北部に広がっ

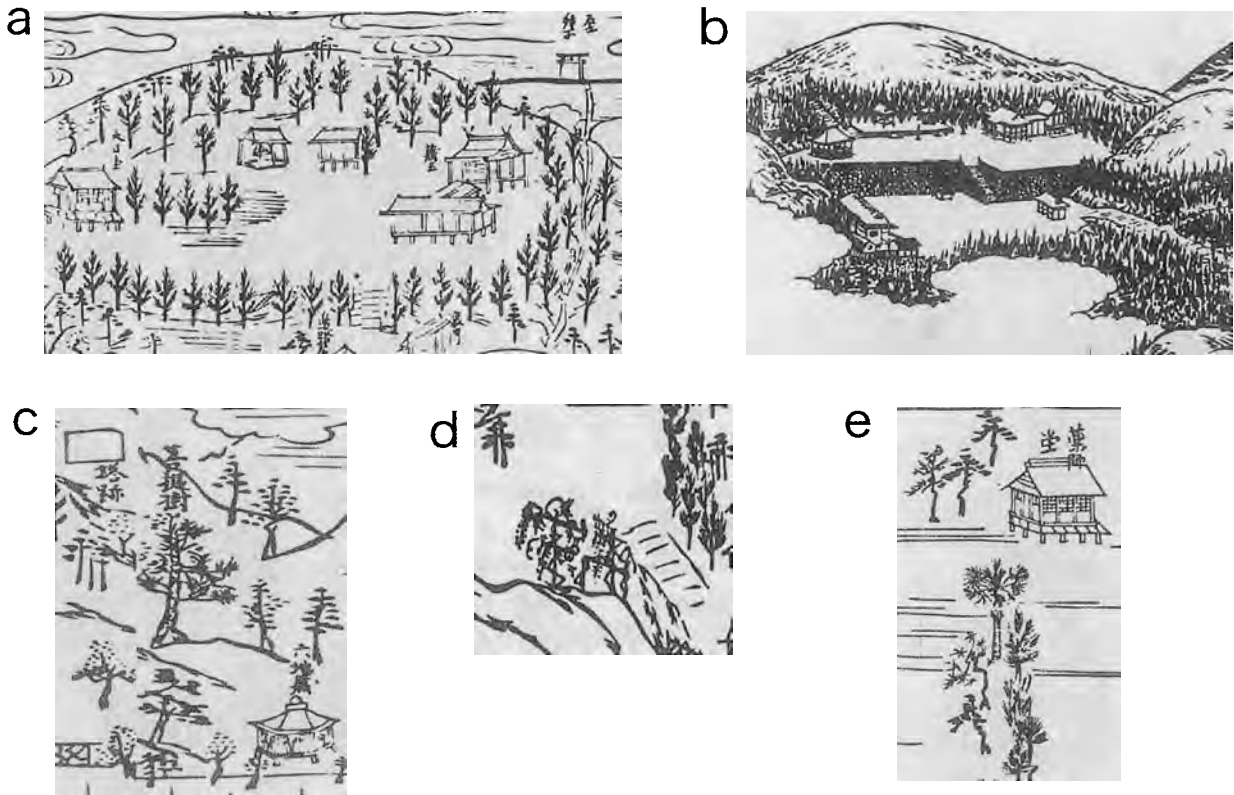


図7 『四国遍路道指南』および『四国遍札名所図会』における木の表現

(a)、(b) は六十番札所横峰寺を描いた『四国遍路道指南』⁴⁾ および『四国遍札名所図会』⁶⁾。山にスギまたはヒノキが多いことが分かる。(c) (d) (e) は『四国遍路道指南』⁴⁾ における様々な木の表現を示しており、(c) は二十番札所鶴林寺の神木の菩提樹、(d) は十一番札所藤井寺の神木の藤である。(e) は瑞運寺（後に六番札所安楽寺と併合された）の境内の木で、シユロやカエデと思われる木が描かれている。

ていた山地のアカマツ林は、ほとんどのアカマツが枯れてコナラ林に変わってしまったことが指摘されている。

また、マツ以外の植物については、『四国遍路道指南』⁴⁾ では霊山寺と大日寺に竹林が描かれている。同じものがずっと続いているかは分からないが、大日寺では現在も竹林が存在する(図5c, d)。

<遍路道の景観について>

これまでに挙げた江戸時代の史料から遍路道の景観について分かるような記述を探すと、松浦武四郎による天保7年(1836)の『四国遍路道中雑誌』⁸⁾に道中の農地の様子を描写している箇所が見つかった。彼は鳴門に上陸後、木津の長谷寺に寄ってから一番札所の霊山寺に向かった。そして長谷寺から霊山寺までを「此間壹り半斗皆農家ツゞきにして到而富る土地なり。砂糖并に藍を製す」と記しているとしており、三盆糖に関わるサトウキビ農家や藍作農家が多かったことが分かる。また、

一番札所霊山寺から二番札所極楽寺、そしてそこから三番札所金泉寺に至る道中については「畑道」とのみ記されている。同様に四番札所大日寺から五番札所地藏寺への道中については「少しの山道を越て下り、此邊農家そこゝに部落す。土地随分繁盛の場所なり」とあり、さらにそこから六番札所安楽寺への道中について「木ちん宿も處々有なり。農家皆砂糖を製し藍を耕る」と記されている。従って江戸末期には、この地域一帯は水田ではなく、サトウキビや藍の生産が盛んだったことが示されている。しかし、化学染料の出現により藍の生産は明治時代の後期に衰微する。明治29年(1896)及び明治34年(1901)の5万分の1地形図(「板東」「川島」図幅)によると、遍路道の両脇は、北側(阿讃山地の南麓)には畑が残っているが、道の南側は水田となっていて、この時期にサトウキビや藍の生産から米作に切り替わっていく様子を読み取れる。また現在では、遍路道の南側は水田の他にレンコン畑が広がり、遍路道の北側の今回歩いた場所では果樹園が目

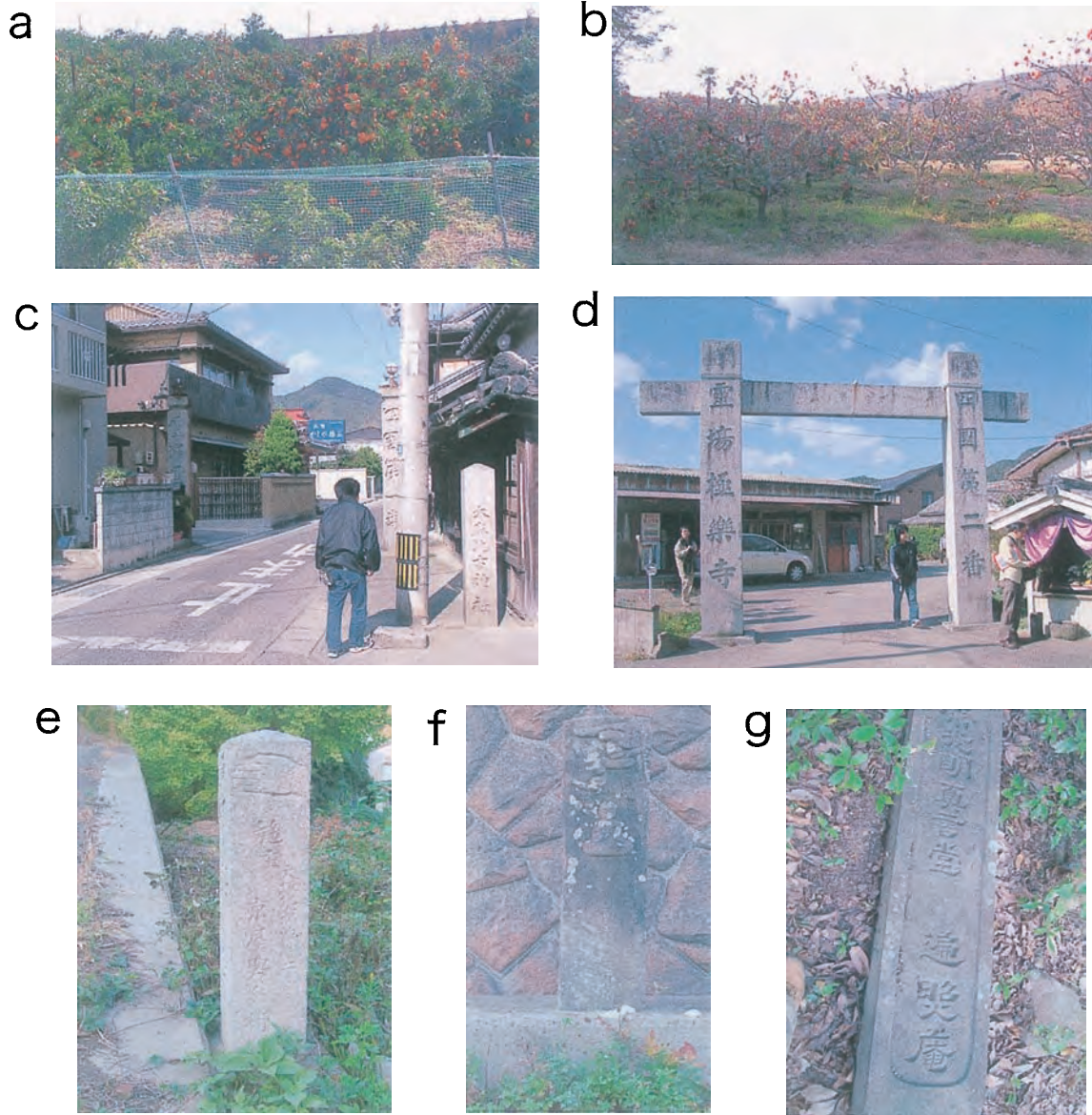


図8 遍路道の景観や事物

(a) 大麻比古神社近くの果樹園。(b) 五番札所地藏寺近くの果樹園。(c) 撫養街道から靈山寺・大麻比古神社参道へ別れる道。(d) 極楽寺手前にある冠木門。(e) (f) 四番札所大日寺手前の道標。(g) 廃道となった旧遍路道にある廃庵に放置された標柱。

立つようになっている (図8 a, b)。1978年の『徳島の自然 - 植物』¹³⁾には、鳴門市大麻町桧には県指定天然記念物の食虫植物群生地があるが、果樹園の開発が進んで見る影もなくなってしまったことを嘆いている文章があり、この時期には果樹園が増えていたことが分かる。

次に遍路道に残る事物の保存状況について述べることにする。一番札所靈山寺から二番札所極楽寺にかけては現在県道12号で結ばれ、それが幹線道路となっていて、車での遍路はこの道を利用

するのがほとんどあり、歩き遍路でもこの道を通ることが多い。しかし、旧来の遍路道はそれより南、JR 高徳線の線路よりわずかに北に位置する道路である。この道は撫養街道と呼ばれ、阿波五街道の1つであった。この道から北に向って靈山寺に続く地点には、一番札所靈山寺や大麻比古神社の参道であることを示す大きな石柱が立っている (図8 c)。またこのあたりには遍路宿もある。ここから二番札所極楽寺へ続く道沿いには、所々、昔そこが遍路の道であったのを示すように

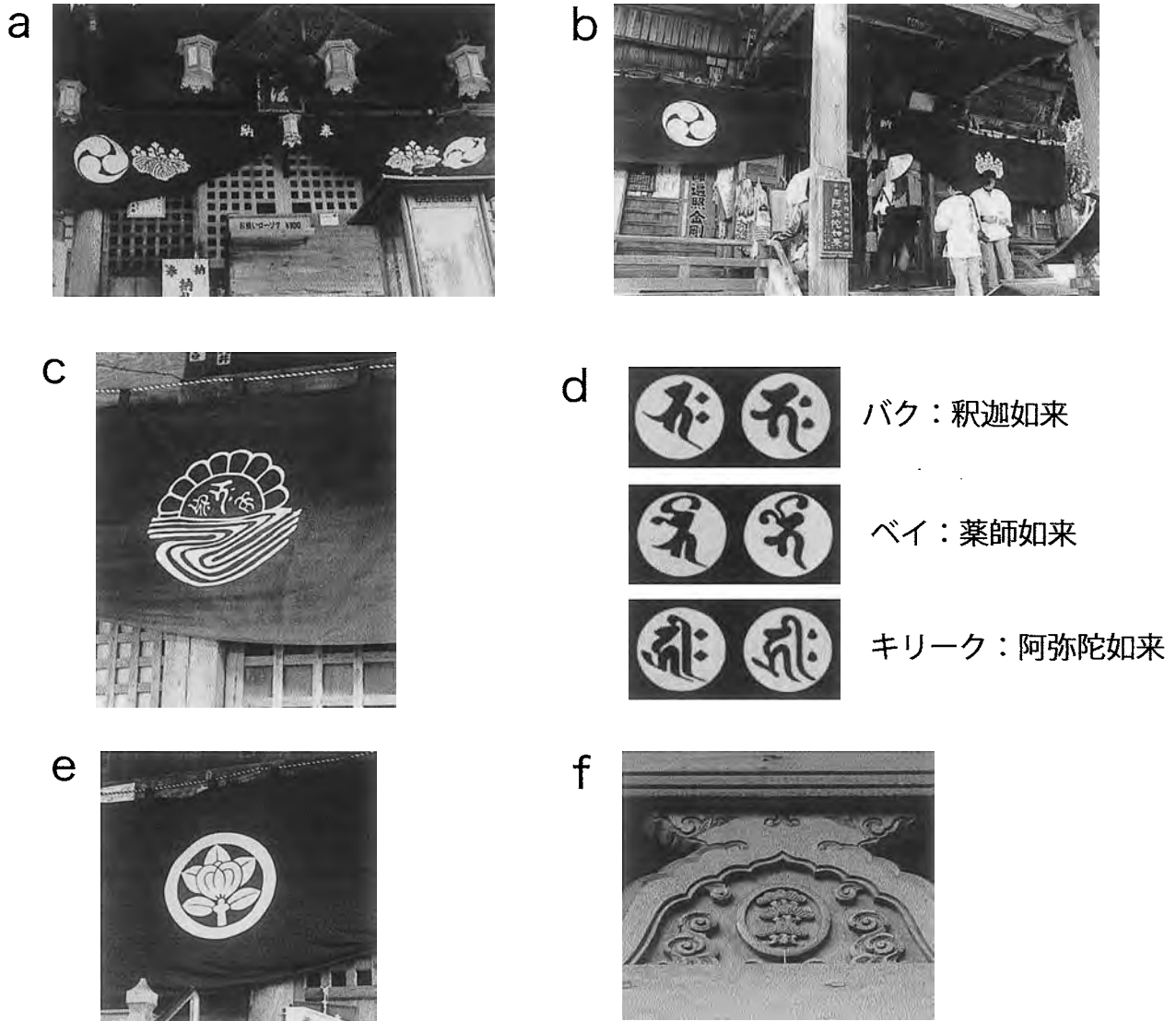


図9 調査した四国霊場の寺紋

(a) 一番札所霊山寺の寺幕。(b) 二番札所極楽寺の寺幕。(c) 三番札所金泉寺の寺幕。
 (d) 金泉寺の寺紋に使われている梵字。(e) 四番札所大日寺の寺幕。(f) 五番札所地藏寺の墓股。

道標、供養塔、地蔵が立っている(図8b)。しかし、もともと別の所におかれていたものを一カ所に集めたと考えられ、昔の風情を残しているかといわれると、そうでない。極楽寺に近づくと大きな石造りの冠木門がある(図8d)。この門は極楽寺への参道口であることを示しているが、極楽寺までの300mの間は普通に民家が立ち並び、そこが参道であったことはまったく分からない。極楽寺へ参詣する人がこの門を見に立ち寄ることはほとんどない現状であり、立派な門であるだけに惜しいことである。

その他、今回歩いた道沿いには道標、供養塔、地蔵尊、へんろ石など遍路の歴史を物語るものが点在していた。これらについては『遍路道 - 徳島県歴史の道調査報告書 第五集』¹⁾に詳細に調べられているので、ここではあまり触れないが、四番札所大日寺に至る道におかれた道標は、現在でも歩き遍路を行う者にとってはその役目を果たしていると言えそうである(図8e、f)。一方で、四番札所大日寺から五番札所地藏寺に至る間の現在では使われていない道に遍照庵跡があり、それを示す標柱が倒れたままに放置されている

(図8g)。

では、今回歩いた箇所はどの程度熊野の道基準に合致しているだろうか。現在の遍路にメインに利用されている道からは、視界に山沿いに延びる高速道路が絶えずあり、景観を大きく損ねている。また、現在道として使われているものの多くは舗装され、敢えて舗装されていない昔の遍路道を使おうとすれば道が分かりにくいという欠点があり(今回の調査でも道に迷ってしまった)、標識の設置等の対策が必要である。熊野古道の基準の最初のものに合う所は、一番札所霊山寺から二番札所極楽寺に至る撫養街道と思われるが、保存だけではなく、遍路道らしさを復活させる整備が必要と思われるし、同時に現在メインのルートとなっている県道ではなく、この道歩く人数を増やさなければならないだろう。

4. 寺紋について

今回調査を行った5箇所の霊場の境内には、寺のマークである寺紋が見られたが、それらはいずれも植物を象ったものであった(図9)。自然と文化との関わりを探るといふ本調査のテーマに沿ったものであると考えて、これらの寺紋に関して調べてみた。表に5つの霊場の寺紋を整理して示す。一番札所霊山寺と二番札所極楽寺は「左三つ巴」と「五三桐」という2つの寺紋を併用している。2つの寺の宗派は、どちらも高野山真言宗であり、本山である高野山金剛峰寺が用いている寺紋(宗紋)と同一である。丹羽基二は『寺紋』¹⁶⁾の中で寺紋を9種類に分類し、その1つ「本山紋」は本山の寺紋やそれにゆかりの紋としているが、霊山寺と極楽寺の寺紋はこれにあたるだろう。

ところが、三番札所金泉寺は、同じ宗派に属しているが、異なる寺紋を用いている。金泉寺の寺紋は「菊水」と呼ばれる紋の中に梵字をはめ込んだものになっている。菊水紋は、この寺を篤く保護した亀山法王から賜ったとされ、山号の亀光山も亀山法王の名に由来すると伝えられる。また室町期には南朝方との繋がりが深く、南朝の長慶天皇が晩年をこの寺で過ごし、御陵も境内にある。ちなみに南朝の忠臣楠木正成も後醍醐天皇から菊水紋を賜っている。そのせいかどうか分からないが、金泉寺の境内にはクスノキが目立つ。

寺紋の中の梵字は中央がバク、左がベイ、右がキリクで、それぞれ釈迦如来、薬師如来、阿弥陀如来を表すとされる(図9d)。この寺の本尊は釈迦如来であり、脇に薬師如来と阿弥陀如来を配した三尊が本堂に安置されており、寺紋の梵字はこの三尊を表していると考えられる。この寺紋を上記の『寺紋』の分類にあてはめれば、「その他(下賜)」と寺の本尊の印に基づく「本尊紋」の組み合わせということになるだろう。

四番札所大日寺の寺紋は「丸に橘」、五番札所地藏寺は「丸に右三階松」であり、それぞれの宗派の宗門とは異なっているが、どのような経緯で

表 寺紋のまとめ

札所	寺紋	宗派	宗紋
一番 霊山寺 二番 極楽寺	五三桐  左三つ巴 	高野山 真言宗	五三桐と 左三つ巴
三番 金泉寺	菊水  +梵字		
四番 大日寺	丸に橘 	東寺真 言宗	東寺雲 
五番 地藏寺	丸に右三階 松 	真言宗 御室派	桜に引き両 

これらの寺紋が定まったのか今回の調査では分からなかった。

以上、5つの霊場の寺紋について調べてみたが、自然(植物)との密接な関係に基づいて作られたことを示すような証拠は見つからなかった。しかし、三番札所金泉寺のように寺の歴史と深く関わる独特な寺紋もあることが分かった。これまで四国霊場の寺紋について注意深く調査研究がなされたことはなかったのではないかと思われるので、今後他の霊場についても調べ、さらに興味深い事例が出てくることを期待したい。また同時に、四国霊場全体としての傾向を把握することも必要であると考えられる。

註

- 1) 『遍路道 - 徳島県歴史の道調査報告書 第五集』. 2001. 徳島県教育委員会編集・発行
- 2) 『四国遍路記集』. 1981. 伊予史談会編.

- 3) 澄禅(知恩院). 『四国辺路日記』. 承応 2 年 (1653)
- 4) 真念. 『四国遍路道指南』. 貞享 4 年 (1687)
- 5) 寂本. 『四国遍路靈場記』. 元禄 2 年(1689). 各札所の見取り図と由来などを記した本で、これは真念が長年の経験で得た資料や情報を提供し、依頼を受けた寂本が彼の学識に基づいてそれらをまとめ、著したもの。
- 6) 『四国遍札名所図会』. 寛政 12 年(1800)頃. 徳島県阿南市の久保武雄氏が(1972)に復刻(全 5 巻)したものが近藤善博編『四国靈場記集』(勉誠社 1973)に集録されている。
- 7) 探古室墨海. 『阿波名所図会』. 文化 8 年 (1811)、文化十一年 (1814)、弘化三年 (1846). 昭和 54 年 (1979) に歴史書社から発行されている。
- 8) 松浦武四郎. 『四国遍路道中雑誌』. 天保 7 年 (1836)、19 歳の時の四国八十八ヶ所靈場紀行をまとめた三巻からなる草稿で、弘化元年(1844)に郷里の伊勢で書かれている。ここでは吉田武三編『松浦武四郎紀行集(中)』(昭和 50 年、富山房発行)を参照した。
- 9), 10), 12) 『徳島県老樹名木誌』と「徳島県老樹名木番附」は徳島県山林会がともに大正三年 (1914) に発行したもので、前者は樹の所在地、大きさ、樹齢、伝説を記した調査報告書であり、写真が添えられている樹もある。大麻比古神社のクスノキについては 43 頁に記載がある。「徳島県老樹名木番附」は、『徳島県老樹名木誌』に掲載されている樹について、その大きさや樹齢から格付けし、相撲の番附に摸した大変面白い史料である。また、『四国老樹名木誌』は昭和三年 (1928) に高知営林局が編集・発行したもので、上下巻に分かれていて、上巻が徳島県と高知県、下巻が香川県と愛媛県の樹についてまとめられている。記述は、『徳島県老樹名木誌』が下地となっている。大麻比古神社のクスノキについては 14 頁に記載がある。
- 11) 横山 春陽. 『阿波名木物語』. 1960. 徳島新聞出版部. 116-117 頁.
- 13) 日出 武敏. 「阿讃山脈の植物」. 木村 晴夫編. 1978. 『徳島の自然 - 植物』より. 31-37 頁.
- 14) 阿部 近一. 『徳島県植物誌』. 1990. 教育出版センター. 31-35 頁.
- 15) 『徳島県環境基本計画』. 2004. 徳島県. 88-98 頁.
- 16) 丹羽 基二. 『寺紋』. 1977. 秋田書店.